

1便当たり3～4人台

JR側「潜在需要あまりない」

JR西日本米子支社市広島県三次市のは21日、三江線（江津）潜在需要見極めなどを



増便社会実験の最終結果を、沿線市町の担当者らに示すJR西日本米子支社総務企画課の国森浩担当課長（左）＝島根県川本町川本、邑智郡町村会会議室

目的に昨年10月から3カ月間実施した代替バスによる増便社会実験の利用者数の最終結果を発表した。各月の1便当たりの利用者数は3～4人台と低調に終わり、JR側は「潜在需要はあまりなかつた」と受け止めざるを得た。結果によると、島根県川本町がスクールバス運行を一時休止した12月が1便当たり4・2人（1日23便）で、

10月、11月の3人台（同17便）から微増。島根中央高（川本町）の登校時間帯や川本小（同）の下校時間帯の便では利用が10人を超えたが、ほとんどの便が1桁にとどまった。列車（1日17便）を含めた調査では、10月が1日平均315人（列車260人、バス55人）、11月が281人（同221人、同60人）、12月が345人（同241人、同10人）で、2011年度の列車の1日平均236人から19～46%増えた。

増便バスのダイヤは、利用者らの要望などを受け設定した経緯もあり、同支社総務企画課の国森浩担当課長は「需要としては物足りない数字。結果を地域交通の在り方を考えるきっかけとしてほしい」と指摘。沿線市町と県が協議を始めた同線とスクールバスとのすみ分けの議論を注視する姿勢を示した。

一方、島根、広島両県の沿線6市町でつくる同線活性化協議会の勝部学事務局長は「沿線地域の盛り上がりも不足し、厳しい結果に終わった。今後、活性化策を強化する必要がある」と話した。